

---

# Only one world

I Z U M I

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Only one world

### 【Nコード】

N0982Y

### 【作者名】

IZUMI

### 【あらすじ】

ある日陸士108部隊の隊長の推薦で六課に新しいメンバーが加わることに。

しかし、六課に来たのはエリオやキャロよりも年下の少年だった・・。

更に彼のデバイスには嚴重なプロテクトがかかっていた。

少年は何者で、そこまでして守りたい秘密とは？

リリカルなのはStrikers 二次創作小説始まります。

## ブログ（前書き）

ブログがひたすら長いです。  
ご注意ください。

## プロローグ

皆…死んだ…。

私に優しくしてくれた人達が…。

皆…み…ん…な…。

最初に…母さん…。

父さんがいないのに、一人で私を育ててくれた母さん…。

あの日から考えて…確か一か月前のこと…。

急に倒れて混乱している私に謎の言葉を残して死んでしまった…。

その時の私にはまったく意味を理解できなかった…。

次に…幼馴染の少年…。

母さんが死んで三日後のこと…。

森に迷い込んだ私を化け物から守るために自分の命を犠牲にした…。

彼は最後に赤い御守りをくれた…。

……私が森に行かなければこんなことには…。

2人を失った私は途方に暮れ見たこともない街をさまよっていた…。

何もせず…何も食わず…何もできず…そして倒れた…。

そこを一人の女性に拾われた…。

母さんと同じ金髪に紅い瞳…何もかもが母さんそっくりでだった…。

彼女は仕事でこの世界に来ているのだという。

彼女にはたくさん仲間がいた。

彼女を含め皆私に優しくしてくれた。

私は久しぶりに幸せ……のはずだった…。

拾われて2週間ほどたったある日…。

突然悲劇が起きた…。

街が燃えていて…たくさんのロボットが集まっていた…。

その中心には五人の女の人が立っていた…。

更に五人の足元には、見たことのある人がいた…。

茶色い髪で片方だけを結んでいるあの人…。

その人は白い服を赤く染めて…死んでいた…。

私は思わず叫び、私に気付いた五人のうちの一人に刺された…。

…はずだったが私を拾ってくれた人が私をかばっていた…。

彼女は仲間の一人に私を逃がすように命じ、三角形のものをくれた…。

私は逃げた。彼女の命令を受けた人と一緒に…。

それから10日後…。

時空管理局という所が作ってくれた転送魔方陣に向かっていた…。

あの五人の追撃から私を守ってくれた人も魔方陣を前に力尽きていた…。

私は彼女が手にしたまま壊れてしまった二丁の銃をとった…。

そして魔方陣に入ろうとした時、涙がこぼれた…。

何故わかったかは知らないが、あの街に残ったみんなが死んだのが…。

泣いたまま再び魔方陣に入ろうとした時…世界が消滅した…。

私は時空間に飛ばされた…私は死ぬのだと悟った…。

しかし、一人の女性に救われた…前にもあったことのある気がした…。

女性は私に問うた。

「幼子よ、お前は力を欲しているな。何故だろう…。おまえからは懐かしい魔力を感じる…。どうだ？私と魔法の修業をする気わないか？」

私は頷いた…。

「・・・少女よ。私はリインフォースという。お前の名は？」

「・・・私の・・・名前は・・・」

「

・・・これが私の始まりなのかもしれない・・・。

## プロローグ（後書き）

リインフ「リインフォースだ。

作者の代わりに注意事項のようなものを述べさせてもらいたくて来た。

まず当分私の出番はないが、私の口調が将にどうしても似てしまうようなので、

ご了承くださいたい。

それと、読んでいる途中意味不明な点がいくつか出てくると思う。

あとプロローグを見ればわかるようにフォワード（以後F）が全員死んだ。

作者曰く すんませんでした！！！！ だそうだ許してやってくれ。オツと長くなってしまうたか？

では、本編で会えるまで作者を温かく見守ってくれ。

## Story 1

### 双鉄拳の少年（前書き）

リインF「一週間ぶりの投稿だ。

私の出番や機動六課の出番もまだ先なのだが、  
とりあえず読んでやってくれ。

というわけで本編を始めろぞ。」



## Story 1

## 双鉄拳の少年

side

ゲンヤ・ナカジマ

俺はとある少年と会う約束をした店に向かっていた。

そして、店に入ってすぐ少年を見つけた。

「よう、坊主久しぶりだな！」

「ゲンヤさん…お久しぶりです。」

「おう、ああそうだ、ほらよ、頼まれた件何とかなったぜ。」

「……！本当ですか!？」

「ああ、しかし囑託魔導師の資格を持っているからって、

なんで民間協力者のお前が本局の、しかもあの機動六課に入隊しようと思ったんだ？」

「……秘匿事項……とでも言いましょうか？」

「ふん。しかし、お前と初めて会ったのは確か…、お前が七歳で、

二年前のあの事件…。ありゃあ驚かされたぜ。」

そう、このガキはまだ九歳…、のくせに戦場に慣れていやがる。

だが、二年前のあの事件…、こいつがいなかったらと思うと…。

二年前

Side

ギンガ・ナカジマ

「くっ！」

私は窮地に立たされていた…。

父さんと一緒に火事の救助活動の最中、足場が崩れて、

要救助者の子供と一緒に火と瓦礫に囲まれていた…。

「熱いよ…、誰か助けてよ…。」

「大丈夫、すぐに助けが来るよ。」

・・・本当に？ 私は自分のデバイスを落としてしまったし、

火の回りが早く、予備の通信機も壊れた…。

さらに、ここを出ようにも足を負傷してしまっている。

助かる可能性は・・・低すぎる。

父さん、スバル、ごめんなさい。母さん、今そつちに　ズドオオオ  
ン

なに！？・・・瓦礫が…吹き飛んだ！！？

「・・・大丈夫か？」

「え？ええ。」

そこには、要救助者の子よりも年下だと思われる少年が立っていた。

少年の腕と脚にはクロスレンジ戦型のデバイスと思われるものを装備している。

「下がっている。」

少年がそういうとほぼ同時に大量の瓦礫が上から降ってきた。

そこで私は気を失った・・・。

二年前・二時間後

side                      スバル・ナカジマ

「父さん！ギン姉！」

「スバル！心配かけてごめんね。」

「一週間以内には退院できるそうだ。」

「本当！よかった。」

お医者さんの話だと足の傷以外目立った外傷はなく、

すでに治癒魔法をかけられた後だったのだろうとのこと。

それと、父さんの話だとギン姉を助けたのは、小さい男の子だとう。

口数も少なく、いつの間にかいなくなっていたらしい。

……あやしい。いったいどんな子だろう？

## Story 1

### 双鉄拳の少年（後書き）

リン？「どうも」、二代目祝福の風、リンフォース？（ツヴァイ）です」。

実は作者この小説のネタ帳らしきものを数冊持っているそうなので・・・、

一冊無断で借りてきました」。

えーとあれ？このページは今回の話のことが書いてありますが・・・、

少し違うようない・・・・・キャー――――――・・・・・。

「しばらくお待ちください」

リンF「すまない、ツヴァイが作者に連れて行かれたため、かわりに私が次回予告をすることになった。

六課に新たなメンバーが加わる。

しかし、新しく来たのはライトニング二人よりも年下の少年だった。

しかも、彼のデバイスには…？

次回・不可解なデバイス

・・・・・こんなネーミングセンスで大丈夫なのか、作者？

オリキャラ設定？（前書き）

アクト「俺の紹介・・・やるだけ無駄だと思うが？」

リン？「もう始まるのですから大人しくするのです！」

## オリキャラ設定？

名前            アクト・リミット            性別            男（？）

年齢            9 歳

スキル            電気の魔力変換資質            デバイス            クロス・ギア

髪型            黒髪で肩に若干かかっている            瞳            青

私服            主に黒のジャージもしくは黄色いTシャツに黒のスウェット  
と短いGパン

バリアジャケット            エリオのバリアジャケットに黒のラインが入っ  
ている

魔力光            金色            好きな色            黒            性格            無口

好きなもの            動物            嫌いなもの            幽霊            タイプ            ミッド、ベル  
力混合

ストーリー設定上まだ謎としか書けない少年（アクト&リインF「  
なら何故書いたー！！」）

2年前にギンガを助けたことからギンガとゲンヤと知り合う。

以降囑託魔導師試験に合格し、陸士108部隊で民間協力者として  
働く（？）。

その後ゲンヤに頼んで古代遺失管理部 機動六課に入隊。

理由は（おそらく）本人しか知らないだろう。

デバイス名      クロス・ギア      声    女性

待機状態    クロスミラージユのラインが銀になっているカード型

形態    指先から肘まである手甲に足から膝まである足甲（でいいのかな？）で、クロスレンジ戦型

しかし、射撃魔法や砲撃魔法をも得意とする。



## オリキャラ設定？（後書き）

リン F「まったく、作者の適当ぶりはすごいな。」

アクト「・・・まったくだ。」

リン？「オリジナル系の魔法はここで紹介するです。」

リン W<sup>ダブル</sup>「では、次回も見てください（見てください）。」「」

## Story 2

### 不可解なデバイス（前書き）

作者「ああ、何という失態だ、（投稿）計画をゆがめてしまった！」

リインF「待て！何故作者初登場で別のアニメキャラになる！」

リイン？「ええと、プランの大幅な修正が必要ね。ですう。」

リインF「お前もか！」

アクト「……サブタイトルと前書きが変だが本編を始める……。

」

## Story 2

### 不可解なデバイス

side

八神 はやて

数日前・・・

今日はゲンヤさんに呼び出されて、いつものお店に私はいた。

なんか大事な話があるらしいんやけど・・・。

「ん？おお、待たせちゃったようですまねえな。」

「いえ、今来たばかりですし。」

実は5分待っていたりして。

「で、何の用ですか？ゲンヤさん。」

「ああ、実は小娘の部隊に入隊したいっていう民間協力者がうちの部隊にいてな。」

「その人を機動六課に入隊させたい、ちゅうことですか？」

「まあ、そういうことだ。」

「んゝ、いくらゲンヤさんの頼みでもなゝ。手続きもめんどそうやしゝ。」

「…こいつが結構役に立つ奴なんだがなゝ。」

「うつ！」

「…認めてくれたらここの支払い今日は俺が持つてやるんだがな。」

「うがつ！・・・くつ、つい一昨日オレオレ詐欺に引っかかってしまつて確かに金欠状態やし。」

「はっ！でもここで認めるのってつまり買収されるっちゅうことに・・・。」

「どうする・・・考える・・・考えるんや八神はやて！」

「昨日の二千円もチャラにしてやつてもいいぞ。」

「・・・のった・・・のったで！ゲンヤさん！」

「ふつ、そうこなつくちなあ。」

「で、その人はどんな人なん？」

「・・・それがだな・・・。」

現在・・・

side

ティアナ・ランスタール

今日に限って集会ってなにをするのかしら？

「あ！スバルさん！ティアナさん！」

「あれ？エリオどうしたの？」

「いえ、それより聞きましたか？今日から六課のFチームに

フォワード

新しい人が配属されるそうなんですよ！」

「え！それって本当！」

「あー、私もそんな話を聞いたわね。」

ヴァイス陸曹の言ってたこと本当だったんだ。

「えー、ティア知ってたの。」

「あ、スバルさん！ティアナさん！エリオ君！もう六課の皆さん集まっていますよ！」

「え？あー！ありがと、キャロ。ほら、二人とも急ぐわよ！」

これでFが5人になる・・・。

新しく来る人がどんな人かは知らないし、レアスキルも持っているかもしれない。

でも、私だつて負けない！

・・・こんなこと・・・なのはさんにぶつ飛ばされてから初めて考えるな・・・。

「あー、今日から六課のFチームに配属される・・・。」

「…アクト、アクト・リミット。・・・よろしくお願いします。」

『ねえ、ティア。、あの子ずっとティアのこと見ていない？』

『バ、バカ言つてんじゃないわよ！』

『ティア、念話だからって大声出さないでよ。』

・・・確かにさっきからこっちを向いている。

でも、まるで懐かしい人を見ているような、そんな視線だ。

何か…不思議な子だな…。

一時間後・・・

side      高町    なのは

・・・？おかしいな、デバイスルームのドアが開きっぱなしだ。

「どうしたの？シャーリー。」

「あ、なのはさん、ちょうどよかったこれを見てください。」

「・・・これってアクトのデバイス？」

クロスミラージュのラインが赤から黒に変わっているようなデザイン・・・

いや、ラインを黒に変えたって感じの待機状態のデバイス。

「はい。本人の了承も得て、訓練などでデータを取ることができるように改造しようとしたら、」

カタカタカタ・・・ビィ

「このようにブロックされてしまっんです。」

「解除はできないの？」

「それが見たことのないプロテクトで、さっきからずっとやっているのですが全然外せません。」

・・・これってあの子が自分で造ったのかな？

・・・これほどまでに嚴重にデバイスをプロテクトで守るなんて、

よほど守りたい秘密でもあるのかな？

あの子・・・いったい何者？



## Story 2

### 不可解なデバイス（後書き）

アクト「タイトルにそつたの・・・最後だけだったな。」

作者「貴様は歪んでいる！」

アクト&リインF「おまえがな!!」

作者「ごふっ!・・・うっ、私は一体？」

リインF「そういえばなんでお前はあそこまでくるっていたんだ？」

作者「ふっ、最初に行っただろう。投稿計画をゆがめてしまったとな！」

リインF「いや、しょうがないんじゃないか。かぜひいていたのだから。」

アクト「今回は次回予告を省略する。それじゃあまたな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0982y/>

---

Only one world

2011年11月29日20時55分発行